

明治四十年頃の作家の日記と日記体の小説

——紅葉・独歩・秋聲の作例から——

石川 かれん

徳田秋聲「隣の医師」⁽¹⁾は明治四十二(一九〇九)年、投書雑誌『秀才文壇』に掲載された。家族と共に山国の温泉宿に逗留する「僕」の日記記事六日分で構成される日記体の小説である。管見の限りではまとまった同時代評はなく単行本にも収録されていない。先行研究では大木志門が作家とその周囲をモデルとする身辺性を指摘⁽²⁾、山口直孝が「事実の提示に主眼を置いている」日記体の小説として言及する他、研究者の関心をひいてこなかった。

本稿は「隣の医師」に関して、明治四十年頃に出版された作家の日記とその受容状況を踏まえつつ、日記体の小説としての位置を検討するものである。そのためまず、この時期の作家の日記が置かれた状況を確認したい。

明治後期は教育分野における日記の活用や出版社による日記帳出版の過熱を通じ、日記が注目された時期である。特に青少年向けに日記は文章修行の一環として推奨され、個人の日記習慣が喚起された。この時期の文芸・投書雑誌には頻繁に学者・教育者・作家等が

日記の効用を論じた記事が掲載される。他方、同時期に青少年、とりわけ文学を愛好する層に求められたのは、作家の来歴や交友関係等の身辺情報であった。日比嘉高が明治三十年頃の投書雑誌『新声』誌上で「作家の性向とその作品とを照応させて読むような読書法」⁽⁴⁾が伝達されたと論じるように、明治三十年代半ばごろから雑誌上で作家の身辺情報が取沙汰されるようになり、明治四十年頃も引き続いて興味をひいていた。

このように、日記そのものへの注目と、作家の身辺情報への関心が交錯する中で、作家の日記が注目された。それを象徴するようにほぼ同時に出版されたのが、いずれも物故作家の日記である尾崎紅葉『十千萬堂日録』⁽⁵⁾と国木田独歩『欺かざるの記』⁽⁶⁾である。いずれも明治四十一(一九〇八)年十月に発行され、当代作家の日記として注目を集めた。次項では二冊の単行本が文学愛好者たちにどのようにして受容されたかを探りたい。

ただし、前提として確認したいのは、この時期に日記を公開する

行為自体があくまでもイレギュラーな出来事として認識されていたことである。日記執筆の効用が説かれ、複数の日記や日記文範、日記体の小説が出版流通した時期ではあるが、日記を書くこととそれを公にすることの間には隔たりが存在していた。このことを確認するために、やや煩雑ながら、明治四十二（一九〇九）年の『中学世界』のアンケート記事「文士諸家の日記観」を参照したい。ここでは、日記執筆による作文力の向上や生活記録の意義自体は認めつつも公開には慎重な意見が頻出する。次に掲げるのはアンケート記事の引用で、それぞれ引用の終りにつけた回答者名は引用者による。

其の日／＼の感情を書いた日記を公にするといふことは考へ物で、なる程読む人は面白いに違ひないが、彼の紫式部の日記などにしても公にされたため、却つて後世では、清少納言より行ひが悪かつたとか、何とかいはれもするやうな次第で。自分で自分の顔へ泥を塗るやうなことがないとも限らない。これは考ふべきことだと思ふ。

（塚原洪柿）

死後、直ちに日記を公にするといふことは、一寸考ふべきことだ。尤も余程経つてから後であれば好いと思ふが、其の日記中の関係者が現存してゐる頃出すのどうか、考へ物である。

（沼波瓊音）

文体は造作なく書くために、言文一致で書いて居るが、自分の考へでは、決して日記を後にまで残さず、死ぬ時は悉皆焼いて了はうと思つて居るのである。

（巖谷小波）

近頃、よく日記が出版されるやうだが、私一箇の考では決して其那事をしたくはない。無論人に見せる為めの日記ではなく、単に自分の心覚えにする為めであるから、（中略——引用者注）死ぬ時には是非焼いて了はうと思つてゐるのです。

（江見水蔭）

一体封建時代の風習として、自分の内証事を他人に語つたり書いて見せたりするのは、大に耻とした処で其昔風のぬけぬ私には、人に見せてはならぬ事を日記に書きません。（内藤鳴雪）

此頃は西洋に於ても、有名な書簡、日記が多く公刊されるやうであります（中略——引用者注）だが、それは出版して、一般の読書会に裨益を与へるやうなものであればいいが、唯単に自己の好奇心を満すといふやうなものでは、感心されません、その上日記を出版するにしても、その時機、その内容を選択することが必要であると考へます。

（片上天弦）

僕の日記帳は一種の雑囊で、論文の下書もあり、旅行記もあ

り、読書から書き抜いた章句や、飲食物の品定めまでも記入してある。だから決して他人に見せられぬ秘密のものだ。

(長谷川天溪)

本特集回答者九名中七名が日記の効用を認めつつ日記の公開、ひいては出版に懐疑を示す。背景には、鳴雪が「封建時代」と指摘するような考え方があつた。十世紀以降の日本で「宮廷儀式、有職故実のための手控え」として具注暦に記された「日録」の影響を指摘する鈴木貞美⁽⁹⁾、さらに鈴木⁽⁹⁾の指摘を踏まえた千葉功⁽¹⁰⁾が指摘するように、明治後期は「家」の中で記録を継承するための前近代的な日記と、個人が書き・読む近代的な日記が混在していたそのなかで、日記の役割に「家」という狭い共同体中での情報伝達を求める世代にとつては日記を近代の出版市場に流通させ不特定多数に回覧することには抵抗があつた。

このことを確認したうえで出版された日記である、『十千萬堂日録』と『欺かざるの記』が、特に文学者と文学を愛好する読書層に以下に受容されたかを検討したい。

一 『十千萬堂日録』と『欺かざるの記』受容の差異

『十千萬堂日録』は明治三十六(一九〇三)年十月三十日に没した尾崎紅葉が、明治三十四(一九〇一)年元旦から十月十日まで記

した日記に、附録として明治三十六(一九〇三)年四月二十三日実施の「銚子紀行」を寄せて出版された。「十千萬堂」は紅葉の俳号であり、単行本全体から俳句趣味が窺える。紅葉はその死後すぐから作品が立てつづけに出版された。生前に企画があつた博文館の全集のみならず、遺稿として明治三十七(一九〇四)年に『病骨録』⁽¹¹⁾、明治三十九(一九〇六)年に『紅葉書翰集』⁽¹²⁾、明治四十三(一九一〇)年に『紅葉遺文』⁽¹³⁾、明治四十四(一九一〇)年に『紅葉遺稿』⁽¹⁴⁾が出版された。『十千萬堂日録』の出版もこの流れの中にある。これらの出版物を受容する読者のまなざしは、次に掲げる『病骨録』の紹介記事にあらわれる。

尾崎紅葉山人が其の生前明治文壇の泰斗と仰がれ、其の死後明治文学史の第一頁に奮闘者の勇名を記すべきは、吾人が敢て茲に贅するまでもなく、江湖の等しく首肯する所なり。されば氏が靈筆に成れると言へば、断篇零墨だも人々の珍重せざるなく、書肆争ふて是れを鉛壺に附して、世に布かざるもの無し。⁽¹⁵⁾

右と同じく『文芸倶楽部』に掲載された『十千萬堂日録』の紹介では、本書が「日記の模範として推奨すべきのみか、日々書き流せし不用意の字句に、何人も企及し能はざる底の面白味ありて山人の真骨頂を窺ふに足る。」⁽¹⁶⁾と書かれる。このように、紅葉の遺文ならば「断篇」までも一見せんとする読者の眼差しに後押しされて、日

記や書簡・遺稿が出版されたといえる。出版元の佐久良書房が広告に「日記は最も偽なき自伝」であり単行本『十千萬堂日録』によって「真の紅葉山人を知られよ」⁽¹⁷⁾と掲示したことも類型と言えよう。

また、硯友社等とは文学思潮を異にする『早稲田文学』の新刊紹介は本書について、装丁の美麗を指摘しつつ「以て書架を飾るべく、以て逝ける紅葉山人の平生を知るべき」と記す。このように雑誌の性格や読者層によって多少の温度差はあるものの、単行本『十千萬堂日録』はおおむね綴られた内容の検討というよりは、尾崎紅葉なる作家への関心や作家を記念するためのものとして受容された。他方、『欺かざるの記』は筆者個人を記念する性格の本ではない。

『欺かざるの記』は明治四十一（一九〇八）年六月二十三日に没した国木田独歩が、明治二十六（一八九三）年から明治三十（一八九七）年までに綴った日記で、はじめに刊行された前篇には明治二十六（一八九三）年二月から二十七（一八九四）年三月まで一年間の日記を収録する。明治四十二（一九〇九）年一月に刊行された後篇と併せ、「事実」感情「思想」との副題が付されたように、本単行本中に示される日記には日常生活の記録というよりも、筆者の感想が多く綴られる。

このことに関して先行研究では肖舜が、明治四十年頃に「日記をつける」ことは「修養」手段の一つとして言説空間に流通していた⁽¹⁹⁾ことを指摘する。さらに肖は同論考で、「修養日記」としての日記とその執筆が日記筆者を「自己反省・自己管理の制度へと導く」

としたうえで、「修養日記」としての『欺かざるの記』は、「煩悶青年」である国木田独歩の挫折・成長を鮮明に物語っている。」と論じた。

ここで、日記筆者にとっての「修養」効果の有無は保留するとしても、『欺かざるの記』に「青年」の「反省」の主題を読む潮流は単行本刊行時既に顕著であった。例えば、先に引用した明治四十一（一九〇八）年十二月号の『早稲田文学』に掲載された相馬御風「新書雑感」⁽²⁰⁾には、「多感の詩人独歩が残した『欺かざるの記』は、同じ時代に於ける青年の生きた思想史である。」と記し、島崎藤村や北村透谷の事例にも触れつつ、次のように書かれている。

『欺かざるの記を』（原文ママ——引用者注）読んで一番深く感じたことは、独歩が反省の人である、不安の人である、動ける人であると云ふ事だ。感じては動き、動きては省る。僕は此の『欺かざるの記』が、反省の記であると云ふ点から、寧ろより多く興味を覚える。（中略——引用者注）独歩の日記は、反省の日記である。（中略——引用者注）

（島崎藤村の——引用者注）『春』と『欺かざるの記』とを併せ読んで始めてあの時代の青年が内外から窺はれる。

ここで御風は『欺かざるの記』を、独歩個人のみならず明治中頃の「青年」の「思想」を知る手掛かりとして捉える。このことは、

同誌の前月号「新刊書一覽」において『欺かざるの記』が「故独歩氏の精神問題の経過と云ふよりは明治新人の心の歴史の一部として見るべきものであらう。」と評されることと呼応する。すなわち、『欺かざるの記』は、日記筆者個人の思想や経歴を知り故人を記念するよりは、日記筆者の「精神問題」の記述を通じて同世代の「青年」の「思想」をうかがうものとして期待された。この点において、紅葉を記念する趣の強い『十千萬堂日録』とは異なる受容がされたといえる。

このように、『十千萬堂日録』と『欺かざるの記』は同時期に出版されながら、一方は尾崎紅葉その人を懐かしみ記念する書として、一方は「明治」の「青年」の思想と精神の「歴史」として異なる受容がされた。以上を踏まえ、次項では作家の日記と明治四十年前後に流行した日記体の小説との関係を、田山花袋の言説を手掛かりに検討する。

二 日記と日記体の小説

田山花袋は明治四十四（一九一一）年四月の『文章世界』⁽²²⁾増刊号中の〈文話〉欄において、『十千萬堂日録』と『欺かざるの記』を比較、同時にこの時期の日記体の小説にも言及した。いうまでもなく、『十千萬堂日録』および『欺かざるの記』の刊行から本増刊号が発売されるまでの期間は、花袋が実在の青年の日記を材料に小説

『田舎教師』を執筆・発表した期間と重なるので、日記への言及もそのことを踏まえたものになる。例えば〈文話〉欄で「『日記』に顕はれた其人の人物は、大抵正面的で、側面的でない。」としつつ「作者が『日記』を材料にして其人物を描かうとする場合には、全然其の『日記』を信用することは出来ない。その感想と情緒とは殊に信用することが出来ない。」⁽²³⁾と書くのは、日記と日記を材料とする小説の隔たりを端的に示したものである。しかし小説について論じる前に、花袋の『十千萬堂日録』と『欺かざるの記』の評価を確認したい。

『日記』は事実を書いて置く方が好い。かう思つたとか、あゝ、思つたといふことよりも、かういふことをした、あゝ、いふことをしたといふ行為を書いて置く方が、『日記』といふものの、本来の性質に叶つてゐる。自己の後年の追憶の為にする上から言つてもその方が便利だ。『十千萬堂日録』は流石に紅葉山人だけあつて、事実が多い。そこからいろいろな情景と情緒とを想像せしむるに足る事実と行為とを記したものが多し。それに引きかへて『欺かざるの記』は前半は感想と情緒とが多く、毎日々々同じことを繰返し繰返し書いてあるので、ちき倦きて了ふばかりか、印象が一つも分明と浮んで来ない。『若い人の日記』と言つたやうなところがある。⁽²⁴⁾

ごく大雑把にまとめれば、ここで花袋は「事実と行為」を綴る『十萬堂日録』に軍配をあげ、『欺かざるの記』が信用ならない「感想と情緒」を綴る点に不満を述べている。花袋の評価は先に触れた、出来事の記録を重視する前近代的な日記意識を受け継ぐものである。一方で、一項に掲げた『早稲田文学』誌上の言説では「青年」「反省」「多感」「思想」等、花袋が批判する「感想と情緒」とそこに伴う「若さ」が寧ろ評価される。この点には、明治四十年頃の文芸雑誌上における日記への期待の変化がうかがえる。

もちろん、『早稲田文学』誌上において、決して『十萬堂日録』の評価が低い訳ではないことからわかるように、「事実の記録」を重視する日記が評価されなくなったのではない。ただ、事実を重視する日記よりも「感想と情緒」に焦点があてられる『欺かざるの記』が、筆者より若い世代の文学を愛好する青年層に好まれたことは注目すべきである。御風をはじめとするこの時期の『早稲田文学』執筆者の多くはおよそ明治十六（一八八三）—二十（一八八七）年頃の生れで、花袋より一回り程若い世代である。この世代はちょうど、本稿の冒頭で触れた作家の身辺記事や、御風が挙げた透谷・藤村らの作品を受容するなかで、いわゆる卓越した自我・思想を求めた世代であり、彼らにとっては故人の「平生」を描きだす『十萬堂日録』よりも「煩悶青年」の思想を直截に描き出す点で『欺かざるの記』が歓迎されたといえる。

とはいえ、花袋が書いたように、思想や感想の提示を主とする『欺

かざるの記』型の日記は記述の信憑性に欠け、また「毎日々同じこと」が書いてある点においても、『十萬堂日録』にあるような生活記録の側面を持ってない。ここで生じるのが、日記に卓越した思想や瞬間的な感情を書く・読むことを求めることで、日記筆者個人の記録としての日記の価値が薄れることである。日記に綴られた感情や思想に記述が焦点化されることで、日記筆者その人の閱歴に関する記述が二の次となる。また、読書が日記に綴られた自我や感情に共感したり、記述によって時代や世代を想起することによって、日記は日記筆者個人ではなく、世代を代表したり象徴するものとして読まれるようになる。『欺かざるの記』は、明治の「青年」の歴史として読まれた結果、生活記録や日記筆者自身の経歴などは二の次として重視されなくなったといえる。

以上のように、日記筆者の日常生活は二の次として、むしろ強烈な感情や思想の発露を日記に求めると、それは花袋が日記の「本来の性質」という事実の記録から離れる。それに伴って求められる日記の分量も変化する。事実の記録や日記筆者の閱歴を重視するならば、言うまでもなく情報をよりこみ日記の信頼性を確保するために、ある程度詳細でまとまった量の記述が求められる。一方、感情や思想を重視するならば、「毎日々同じことが繰返し繰返し書いてある」と読者が「倦き」ることもあって、劇的な記述がピンポイントに提示されればよい。とすれば、『欺かざるの記』型の日記は累積された記録ではなく、瞬間的な感情を印象的に綴り、読ませるものに

なるので、短くて良いことになる。

このような感情を印象的に綴る日記を考えると、本来の日記よりむしろ同時期の日記体の小説の議論がその性質を言い当てている。ここでは先に引用した『文章世界』の〈文話〉欄で花袋が、前田晃のモウパッサン翻訳集⁽²⁶⁾を取り上げた指摘を例としたい。

巻首に書いてある「ホルラ」宇宙には我々の感覚には感じられない何物かゝあるとして、其怖れを日記体に書いたもの、あれなどは当然一人称で書くべきもので、三人称では書けないものかもしれない。(中略——引用者注)ホルラは何方かといふと面白く読ませ得る性質の事柄ではなく、随つて書きばえのする物でも無い。が我々はあの作を読み出すと、主人公の不思議なる心理も、最後に自分の家へ火を放つといふ狂人めいた事も、何等の無理もなく読んで行く。そして其れが作者(日記筆者の意か——引用者注)の強い感情に引きずられて行くので、強い感情は一人称で書いてあるためにあれ程に現はれて居るのだと思はずには居られない。あれが若し三人称で書いてあつたならば、不思議な心理は唯不思議としてのみ感じられて、或は最後まで深い興味を似て(原文ママ——引用者注)読めなかったのかも知れぬと思つた。⁽²⁷⁾

「ホルラ」は五月八日から九月十日まで三十九日分の日記記事で

構成される日記体の小説である。分量から分かるように日記が綴られる頻度にはむらがあり、それは日記筆者の精神状況に依存する。

「ホルラ」の日記筆者は悪夢にうなされるようになり、その原因を超常的存在のホルラに求めるようになる。目に見えないホルラが自身に憑いていると考えた日記筆者は、ホルラを殺すために屋敷に放火するが、結果としてハウスキーパーたちを焼殺してしまう。焼け落ちた屋敷を見てホルラは火では死なないと考えを変化させた日記筆者は「すれば——すれば——俺は自分が死なねばならぶと思ふ!」と自死の予感を記し日記は終わる。日記記述の大半は知覚できぬ超常現象への怖れと狂気に陥る精神的危機に割かれる。

山口直孝は前掲書で日記体の小説について「主人公の精神的な葛藤を直截に伝えるものとして有効な手段」⁽²⁸⁾と指摘する。「ホルラ」は山口が指摘する典型を踏襲していると言えるだろう。そして、『欺かざるの記』を「感想と情緒」「毎日々々同じこと」を書いてあると批判した花袋が「ホルラ」は日記筆者の感情があらわれるために成功と評することから、この時期に日記と日記体の小説を隔てる価値判断が生じていることがわかる。すなわち、本来の日記では歓迎されない感情的な記述が日記体の小説では評価される。

明治四十年前後の日記体の小説の流行において、作品の多くが精神的な危機を扱うものであったことの理由の一端もここにある。すなわち、本来記録を主とする日記が、作家の身辺情報への関心と重なるなかで、文学青年たちがまなざす卓越した感情や思想を描きだ

す空間として求められた結果、感情や思想を効果的に提示できる一人称文体の形式として日記体が流行した。一方で、『十萬堂日録』型、日記筆者の平生を綴る型は読者の要求に沿わず、日記自体の伝記的側面は評価されつつも、小説としては好まれなくなる。日記が備える記録の役割が薄れ、感情や思想を強調する日記体の小説が量産されることになった。

一方、記録を重視し感情や思想の発露を抑圧する日記体の小説は皆無ではない。例えば徳田秋聲の「隣の医師」は、前掲書で山口が指摘するように、「事実の提示に主眼を置いている」日記体の小説である。次項では、流行と一致しない「隣の医師」における日記記述の特徴を検討したい。

三 「隣の医師」における感情抑圧

「隣の医師」は「△五月二十日」「△二十一日」「△二十二日」「△二十三日」「△二十四日」「△二十六日」と記される六日分の日記記事で構成される。温泉宿に逗留する日記筆者「僕」の日常生活が多く綴られる日記で、宿や客の様子や女中の噂話が淡々と記される筆致からは、確かに山口が指摘するような事実を記録する日記と読める。一方、「隣の医師」の日記中に日記筆者の感情が全く綴られないわけではない。そのことは、綴られない二十五日前後、肺病の診断後の日記記述において、出来事が起きた時点とそのことを日記綴る

時点のずれにあらわれている。

日記の前半、二十三日午後に行われた医師の診察まで、日記はおむねその日に起きた出来事の実を淡々と綴る。一方、二十三日に肺病と診断されて以降の日記には、日記筆者が直面する精神的な危機が記述のずれに伴ってあらわれ、筆致も変化する。二十三日に行われた診察と肺病の診断が日記に綴られるのは「△二十四日」である。その理由は日記筆者自ら「昨日の晩方（二十三日の夜——引用者注）は、少し面喰つたので、僕は診察の模様を記す勇气がなかった。」と綴る通り、診断結果に衝撃を受けたゆえである。とすれば、ここで記録という行為を妨げるのが日記筆者の精神的危機であることは明白である。

精神的危機を抱えながら執筆された日記は「△二十三日」「△二十四日」であり、例えば「僕は一日、失心して暮した。」「僕は部屋の中中に突立つたまま、堪へがたい寂寞を感じた。」（△二十四日）、「僕は頭脳がシーンとして来た。胸には動悸も高つて来た。」（△二十四日）等の記述にそのことが読み取れる。一方で、日記筆者は感情的な筆致を避けようとする。先の引用部でも、日記筆者の感じる「寂寞」や危機感は「僕は——した」の話題で感情を抑圧し、自身の行動や感情を過去の事実として記録される。

このように、精神的危機の渦中にある日記筆者が感情を抑圧し事実を綴ろうとすることは、隣の医師の診察の様子を記す部分によくあらわれる。「隣の医師」における日記に記される平坦な日常の中

で転機となるのは、隣の医師によつて日記筆者に肺病の診断が下される出来事である。診察の様子は「△二十四日」と記された日記に記述されているが実際に診察が行われたのは二十三日であり、ここには時間的なずれが生じている。このことを踏まえ、「△二十三日」と「△二十四日」の継ぎ目を見てみたい。

（「△二十三日」末尾―引用者注）

僕は間もなく、妻に促されて隣の医者（の玄関口）へ入つて行つた。

△二十四日

今朝、此処に下宿してゐると云ふ、大尉を初めて廊下で見た。顎髯の品よく疎に生えた武張つた風采である。女中の話では、山形の人だと言ふが、成程然云ふ地方色は、様子にも著しかつた。

（中略―女中による大尉の噂話―引用者注）

さて昨日の晩方は、少し面喰つたので、僕は診察の模様を記す勇氣がなかつた。

隣の医師の家には、丁度宿の大尉が遊びに行つてゐた。脚の病氣をしてゐるとか云ふ、大な獵犬の首玉を撫でながら大尉は、上口に腰かけて、高声で話込んでゐた。

「△二十三日」の記述が中断し「△二十四日」に続いたことは明らかだが、「△二十四日」は「診察の模様」の描写からではなく「今

朝」つまり二十四日朝の記録から始まる。ここで朝の記録、大尉に関する噂話の記述は、医師の診察とその結果を記すための導入部として位置付けられる。「△二十三日」末尾において日記筆者が入つたと記述する「隣の医者（の玄関口）」にはまさに件の大尉がいたのであり、玄関から進んだ先で行われた「診察の模様」を記すための媒介として大尉の噂話が記されている。ここで日記筆者は「△二十四日」に大尉の噂話を日記に記したからこそ、前日に中断した「診察の模様」を記すという行為を再開することに成功した。しかし、そもそも何故「診察の模様」を記すのに「勇氣」が必要なのか。それはもちろん、自身が肺病であるという危機のためである。

「診察の模様」が記された部分の特徴として、執念的なまでに詳細な描写を挙げることができる。日記筆者は「△二十六日」における「まさか、そんなぢやないと私は思ふ」と、目を舜つて、自分で否認するやうな口を利いた。の記述から自明である通り、自らが肺病であり死んでゆくことを「否認」しようとする。それでも記述をしようとする時、「否認」せんとする自己を抑えるために選択されるのが感情を抑圧した詳細な描写である。

そもそも、肺病宣告の以前から医師の診察は明らかに異様である。先約の患者がいなくてもかわらず日記筆者を長時間待たせることや、診察前に「講義でもするやうな調子で」症状と無関係な長話をする、こと、「効能は先無い」と断じた温泉を後になって「相当に効驗」があると述べることは、日記筆者が医師に疑念を抱くに十分な

要素である。実際はじめは医師を「真摯な研究的の体度（原文ママ——引用者注）」と称した日記筆者だが、中途では長話を続ける医師を「狂熱の気味」として「挙動でそれを圧止した」として、評価を変化させている。とはいえ、日記筆者は生じた疑念を日記に綴らない。医師への疑念は診断への疑念につながり、そうなれば「肺病」の診断とそれによってもたらされた危機を巡って結論の無い煩悶の記述が続くからである。

このように感情を抑圧して「診察の模様」を書き終えた日記筆者は、書き終えたまさに今、自身が肺病であり死んでゆくことを想起する精神的な危機に直面している。そのために「△二十四日」の末尾はそれまでの詳細な記述と相反して「僕は叮嚀に送られて、この荒れたやうな医者の家を出た。」の一文をもつて唐突に切れる。すなわち自身の危機を書くこと自体が、日記筆者にとっては「勇気」を必要とする困難な試みであり、記述は動揺や疑念などの感情を抑圧してしかなし得ない。

「診察の模様」以外の部分においても、感情を抑圧しながら生活を記録する日記の綴られ方は同じである。反復される「僕はくした」の表現は、過去形の日記筆者「僕」を記録・規定し「こうであった」と確認してゆく作業に他ならない。また、ここでは日記筆者の周囲を取り囲む他者もまた「妻はくした」「女中はくした」「医者はくした」等と同一の形式で記述される。このように日記筆者が人物を記述することは、他者との関係性の中で自己を位置付ける試みとなる。

「僕」と周囲の他者を同時並行で記述することで自己の位置付けを明文化するといえよう。

このことを端的にあらわすのは、「△二十四日」で唐突に用いられる「旅の患者」という自称である。「診察の模様」を記す場面で日記筆者は、「医者は、旅の患者をベッドに押据ると、何か煮物でもしてあるらしく、気忙しさうに奥へ入つて行つたまゝ、暫く出て来なかつた。」として、自らを「旅の患者」と称する。自らを三人称的視点で描写したこの表現は、テキストの表題「隣の医師」に対応するサブタイトルに他ならないと言えよう。他者を自分の逗留する宿の「隣」に住む「医師」として、自らを「隣の医師」から見た時に余所者である「旅」人の「患者」として綴ることは、他者との関係性の中で自己を位置付けてゆく行為の発現である。

先に確認したように、二十三日夕方に肺病の診断を下された日記筆者の精神的危機は、二十五日夕方に東京から到着した磯野医師の診察によつて肺病が否定される部分までの約二日間渡る。二十五日夜は飲酒し、日記を書かなかつたので、二十六日になつてから前日をふりかえり綴つたのが「△二十六日」の記事となる。ここで「△二十六日」日記冒頭の記述を確認しておきたい。

不安な二三日が過ぎた。

僕は何をするのも億劫になつた。夫婦間には色々のシミジミした話が交された。弱い涙の零れるやうなこともあつた。

僕は毎日ケレオソートの香のする散薬と、水薬とを服んだ。

引用部で「不安な二三日」と指されるのは、二十三日夕方から二十五日夕方までの、日記筆者が精神的危機の渦中にあった期間に他ならない。この間、日記筆者が「弱い涙の零れる」様子、すなわち自身の精神的危機を記さないために、日記には二十五日の記事が欠落している。日記筆者が自身の精神的な危機を綴るのは、あくまでもそれが解消されたのちである。

このことを踏まえて、日記の前半、「△五月二十日」「△二十一日」「△二十二日」に綴られたものを確認したい。再三確認したように本作における日記は事実の記録を重視しているが、その中でも特に他者と自己との関係性が重点的に綴られる。作品タイトルの「隣の医師」が日記筆者の逗留する宿の隣に診療所を構えるゆえにそう呼ばれ、その診察を受ける日記筆者が自身を「旅の患者」と称することにより、本作は冒頭から日記筆者とその周囲を取り巻く他者とを対置して記述されてゆく。

宿の部屋に荷物を置いたのち「落着悪さうに」座る「僕等夫婦」や「もうドン／＼劇しい響を立て、」走り回る子供、酒を飲む「商人風の男が二三人」等、日記筆者は自分が見聞きした他者の言動を詳細に記録する中で、自身の位置付けを描きだす。ここでは、他者との関係性を基軸として、自己の生活を記録する方法が取られる。とすれば、個人的な煩悶や感情を綴ることによって、日記筆者は

孤独に陥ることになり、自己の生活を綴ることができない。であればこそ、精神的危機を脱した日記筆者は直接的に隣の医師を非難する記述をするのではなく、隣の医師宅から聞こえる「子供の泣声」を綴りながら女中や磯野医師の噂話を記すことで、間接的に誤診の安堵や隣の医師の悲哀を描きだした。

本作において感情表出を避け、身辺性も明示しない日記体の効果は、精神的な危機に直面する自己の記録を綴ろうとしながら、一方で不安を直接的に綴ること自体を避けようとすることで、直接的な感情表現を避けながら危機の推移を記録することにある。その意味で、直接的な感情表現や日常生活から逸脱した思想の発露を重視するこの時期の日記体の小説に一石を投じるものであった。不安定な自己やその感情をあげすけに綴るのではなく、不安定な自己を綴ることそのものにまつわる不安を、感情を抑圧しつつ日付のずれによって顕在化する作品といえよう。

おわりに

日記体の小説は、日記という形式が備えた特徴のうち、精神性や秘密の暴露といったものを前面に押出しながら、筆者の感情や思想を直接的に表現するものとして流行していった。「隣の医師」が発表時耳目を集めず、また感情を抑圧した日記を提示する型の日記体の小説が好まれなかった背景には、文学愛好者たちの日記への期待

がすでに『欺かざるの記』型、感想や思想を重視する方向にむかっていったからであろう。

日記体の小説はこの時期に、それまでの記録を重視する日記から離れ、感情表出型へむかってゆく。本来の日記に重視された出来事の記録ではなく、個人の内面や感情表出の記述に重点をおくものとして流行した結果、本来の日記とは異なる独自の日記体と変化した。性質の異なる二つの日記、『欺かざるの記』と『十萬堂日録』

がほとんど同時に出版されるなかで、『日記の本来の性質』を備える」と指摘される後者ではなく、感情表出を主とする前者を歓迎した文学愛好者たちの中ではこの時期に、「日記」に対する期待が変化したといえる。その結果明治四十年代後半には感情を重視する日記体の小説が流行した。もちろんこのことは山口が「作者と同質の書き手が苦衷を語っていく型だけが重視され」日記体の小説が衰退したと指摘することにつながるが、その一方で「隣の医師」のような別型の作例が試みられていたことには注意を払う必要がある。

注

- (1) 徳田秋聲「隣の医師」『秀才文壇』第九卷第十八号（明治四十二年八月二十日）
- (2) 大木志門「秋聲文学における「自然主義」と「私小説」の結節点——明治四〇年代短篇小説の達成」紅野謙介・大木志門編『21世紀日本文学ガイドブック⑥ 徳田秋聲』（平成二十九年二月 ひつじ書房）
- (3) 山口直孝「『クローディアスの日記』論——敵対する日記」「私」を語

る小説の誕生——近松秋江・志賀直哉の出発期」（平成二十三年三月 翰林書房）

- (4) 日比嘉高「自己表象の文学史 自分を書く小説の誕生《私小説研究文献目録増補版》」（二〇〇八年十一月 翰林書房）
- (5) 尾崎紅葉「十萬堂日録」（明治四十一年十月 佐久良書房）
- (6) 国木田独步「欺かざるの記」（前編・明治四十一年十月 後編・明治四十二年一月 いずれも佐久良書房（共同刊行・隆文館））
- (7) 「中学世界」第十二卷一号（明治四十二年一月）
- (8) 懐疑的な見解を明らかにしたいのは河合醉茗および蒲原有明。
- (9) 鈴木貞美「日記」および「日記文学」概念をめぐる覚書『日本研究』（二〇一一年十月）
- (10) 千葉功編『日記に読む近代日本2 明治後期』（二〇一二年五月 吉川弘文館）
- (11) 尾崎紅葉著、巖谷小波編『病骨録』（明治三十七年三月 文禄堂）
- (12) 尾崎紅葉著、星野麦人編『紅葉書翰集』（明治三十九年 博文館）
- (13) 尾崎紅葉著、星野麦人・篠山吟葉編『紅葉遺文』（明治四十三年一月 隆文館）
- (14) 尾崎紅葉著・石橋思案編『紅葉遺稿』（明治四十四年 博信堂書房）
- (15) 「紹介」『文芸倶楽部』第十卷第五号（明治三十七年四月一日）
- (16) 「紹介」『文芸倶楽部』第十四卷第五号（明治四十一年十二月一日）
- (17) 広告の引用は田山花袋『田舎教師』（明治四十二年十月、佐久良書房）
- (18) 「新刊書一覽」『早稲田文学』第三十七号（明治四十一年十二月一日）
- (19) 肖翊「煩悶青年」と「修養日記」——近代日記文学『欺かざるの記』論『跨境』十四号（二〇二二年）
- (20) 相馬御風「新書雑感」『早稲田文学』第三十七号（明治四十一年十二月一日）
- (21) 「新刊書一覽」『早稲田文学』第三十六号（明治四十一年十一月一日）
- (22) 田山花袋「日記の種類」『文章世界』第六卷第六号（明治四十四年四月）

十五日

(23) 注(22)に同じ。

(24) 注(22)に同じ。

(25) 注(18)に同じ。

(26) 前田晃訳『短編十種 モウパッサン集』(明治四十四年二月 博文館)

(27) 田山花袋「一人称と三人称」『文章世界』第六卷第六号(明治四十四年

四月十五日)

(28) 注(3)に同じ。